島根県立看護短期大学紀要
第5巻，101－107，2000

# 看護学生の老人イメージに関する研究

梶谷　みゆき・倉鋪　桂子*

# A Study on Nursing Student's Image of Elderly People

Miyuki KAJITANI and Keiko KURASHIKI

## 概　要

看護基礎教育における老年看護学の教育内容に示唆を得るために，老年看護学を学ぶ直前の看護学生にＳＤ法を用いた老人イメージの調査を実施した。その結果，高齢者に対して全体的にマイナスイメージを抱いていること，イメージに影響する因子として，祖父母との同居経験の有無や祖父母の健康状態，祖父母との親密な会話の有無などがあることが分かった。老年看護学において，統合された能力をもつ高齢者のプラスイメージをより強化し，高齢者の理解やケアに柔軟な捉え方が出来るよう，教育内容の検討が必要である。

**キーワード**：老人イメージ，ＳＤ法，因子分析，看護学生，看護教育

## Ⅰ．はじめに

最新の全国人口動態調査によれば，最近５年間において老年人口は毎年70万～80万人のペースで増加しているという。老年人口の増加は，即ち介護保険制度に対する地方自治体の財政負担や，高齢者の疾病に伴う医療費の負担等，急速に進む高齢化の社会情勢に影響され，ややもすると暗いイメージを抱きやすい。

しかし，その統合された能力によって，高齢者の社会への貢献度の高さが再評価され，老人パワーを形成する高齢者層が出来ている。とかく暗いイメージにつなげられやすい，虚弱な高齢者や介護を要する高齢者の割合は全体の15%にも満たなく[1]，残りは多少健康障害を持ちながらも自立した高齢者である。今日のように全人口の６人に１人が高齢者となった高齢社会においては，深沢七郎の「楢山節考」や有吉佐和子の「恍惚の人」の中で著されている老人イメージとは異なる，新しい老人イメージが形成されつつあるのではないかと考える。

一方，高齢者に対する援助を行う際，援助者が持つ老人イメージや老人観が，援助者自身の姿勢やケアの内容に影響を及ぼすと言われている[2)3)]。看護学生が看護者として成長する過程に関わる者として，学生たちの中にある老人イメージを踏まえながら，より豊かなイメージ形成が出来るよう，効果的な関わりをしていきたいと考えている。本研究は，看護学生の老人イメージを明らかにし，看護基礎教育における老年看護学の教育内容について示唆を得る目的で行った。

*鳥取大学医学部保健学科

## Ⅱ．研究方法

### 1．対　象

本学看護学科２年次生　80名

### 2．調査日および調査方法

平成11年4月13日（老年看護学開講初日）。研究者の意図が調査結果に反映するのを避けるため，講義を始める前に，調査の目的を説明し，同意を得た学生に対してその場で調査用紙を配布し調査ならびに回収をおこなった。

### 3．調査内容

調査内容は①学生の基本属性，②祖父母との同居経験③祖父母の健康度④祖父母やそれ以外の高齢者との接触の頻度⑤高齢者を主体とした行事への参加経験⑥老年看護への意欲を学生の生活背景としてとった。②～⑥の属性は，先行研究[4)~6)]において老人イメージに何らかの影響を及ぼす因子として考えられた項目を精選したものである。老人イメージの測定は，保坂らが作成したＳＤ法による老人イメージ尺度50項目[7)]を使用した。

### 4．分析方法

分析は，エクセル統計を用いた。まず，ＳＤ法50項目毎の単純集計を行なった。得点は，尺度左端の「非常に」から各段階毎に１，２，３，４，５点を与えた。尺度の妥当性を高めるために，調査時には形容詞対を図とは逆に左右を入れ替えて調査した項目もあるので，ここでは結果を読みとりやすくするために，また因子分析をするために高い負荷量を示す数値がプラスに換算できるように，尺度の方向を統一した。

次に，より総括的に捉えるために因子分析を行い，いくつかの因子を抽出することを試みた。最初は50項目全ての項目を使用して因子分析を行ったが，標準偏差の小さい項目，因子に対する共通性が低い項目などを，２段階を経て13項目除外した。最終的に37項目で因子分析を行いバリマックス回転によって固有値１以上の因子が６つ抽出された。６因子の累積寄与率は58.9％であった。最後に因子分析によって抽出された６因子と学生の生活属性別にクロス集計を行い平均評定値を求めた。平均値の差の検定はｔ検定を用いた。

## Ⅲ．結　　果

調査票は80名に配布し，78名の回答を得た。（回収率97％）78名中１名は男子学生であった。出身地別では島根県内出身者が56名（72％），県外出身者が22名（28％）であった。祖父母との同居経験のある者は58名（74％）であり，うち７名（９％）は現在も同居していた。その他，学生の生活属性について表１に示す。

表１　学生の生活属性

n＝78

| | | | |
|---|---|---|---|
| 同居の有無 | 現在も同居 | | 7 |
| | 短大入学まで同居 | | 34 |
| | かつて同居 | | 17 |
| | 同居経験なし | | 20 |
| 同居者における祖父母の健康状態 | 祖父 | 自立している | 28 |
| | | 要介護状態 | 13 |
| | | その他 | 1 |
| | 祖母 | 自立している | 46 |
| | | 要介護状態 | 2 |
| | | その他 | 3 |
| 祖父母との会話の頻度 | 1. とても親しく会話をする | | 27 |
| | 2. 親しく会話をする | | 25 |
| | 3. ふつう | | 15 |
| | 4. あまり会話をしない | | 8 |
| | 5. 会話をしない | | 2 |
| | 無回答 | | 1 |
| 祖父母以外の高齢者との会話の頻度 | 1. とても親しく会話をする | | 13 |
| | 2. 親しく会話をする | | 18 |
| | 3. ふつう | | 18 |
| | 4. あまり会話をしない | | 16 |
| | 5. 会話をしない | | 10 |
| | 無回答 | | 3 |
| 高齢者だと思う年齢 | 40～59歳 | | 0 |
| | 60～69歳 | | 44 |
| | 70～79歳 | | 27 |
| | 80～89歳 | | 5 |
| | 90歳以上 | | 0 |
| 高齢者を主体とする行事への参加経験 | あり | | 29 |
| | なし | | 49 |
| アンケートに回答する際イメージした人（複数回答） | 性別 | 男性 | 37 |
| | | 女性 | 37 |
| | | 両方 | 16 |
| | | 無回答 | 4 |
| | 思い浮かべた具体的な人物 | | |
| | 祖父母 | | 59 |
| | 親戚・近所など身近な高齢者 | | 18 |
| | TV・書物等の登場人物 | | 8 |
| | 実習で出会った患者 | | 8 |
| | その他 | | 14 |

### 1．ＳＤ法50項目における平均評定値

図１－１，１－２ に示したのは，各項目の平均評定値である。全体的には３よりやや左より，即ちややマイナスの老人イメージを示した。50項目全体の平均値は2.785であった。特に低い得点を示したのは，「遅い」，「保守的」，「地味な」，「弱い」，「小さい」，「強情な」などの項目であった。その中で最も低い得点を示したのは，「遅い」の項目で1.831であった。一方，高い得点を示したのは，「あたたかい」，「優しい」，「親密な」，「賢い」であった。そして，最も高い得点を示したのは「あたたかい」の4.026であった。

### 2．因子分析による因子の抽出と解釈

ＳＤ50項目を先述の方法で精選し，最終的に37項目で因子分析した結果を表２に示す。

第１因子で負荷が高かったのは 「消極的な－積極的な」，「劣った－優れた」，「無能な－有能な」，「空っぽな－満たされた」，「愚かな－賢い」などである。高齢者が肉体的に何かをなし得る

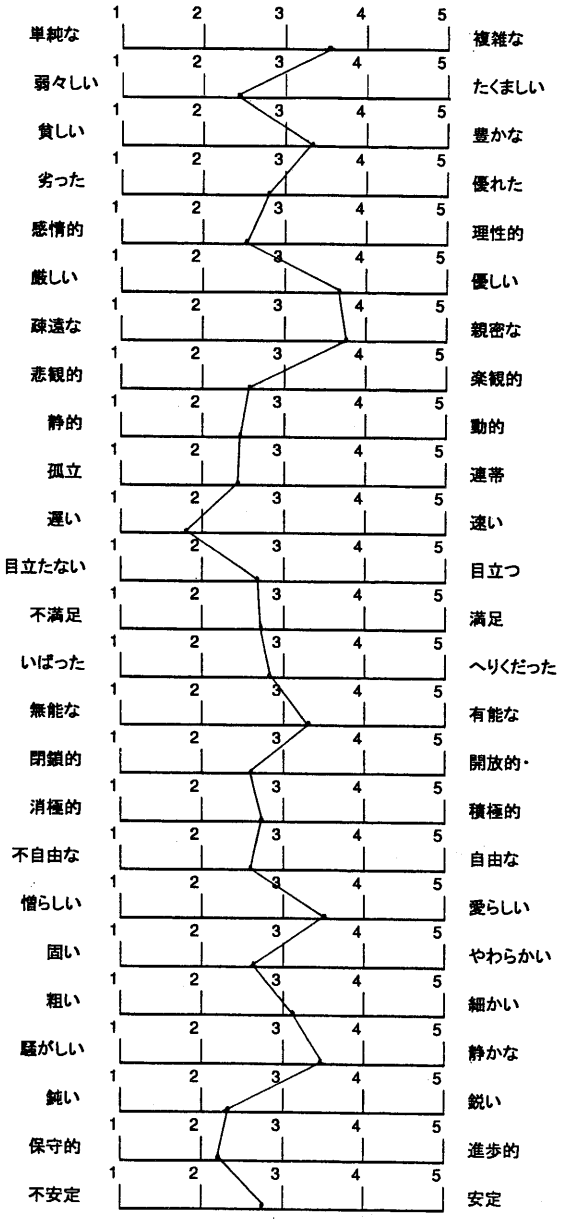


図１－１　各尺度の平均評定値

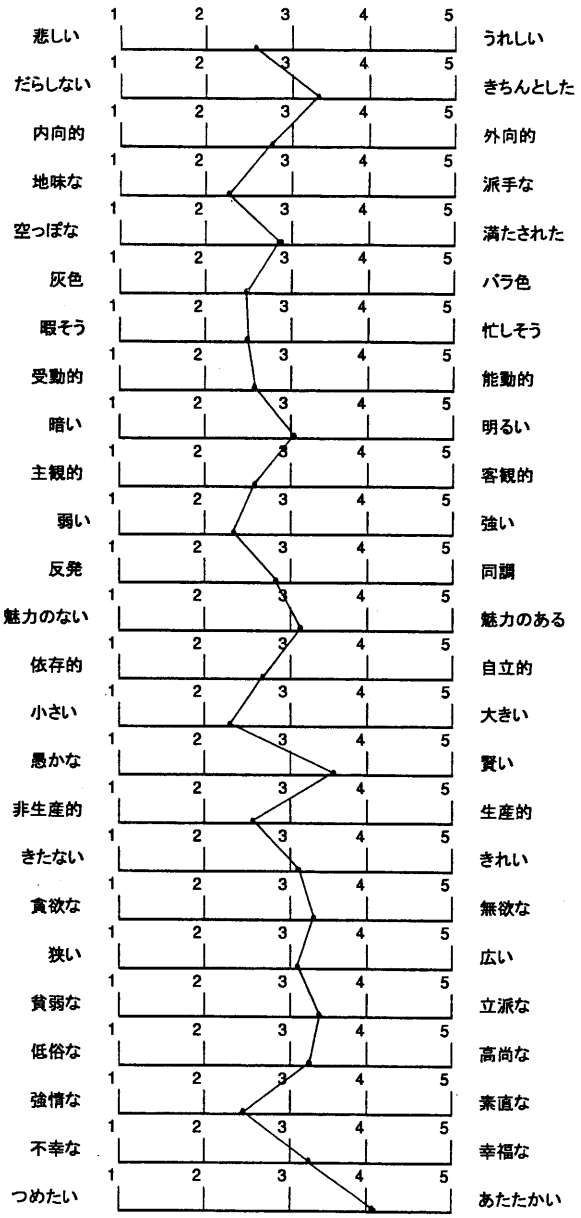


図１－２　各尺度の平均評定値

表２　各因子に含まれる尺度とその負荷量

n＝78

| 因　子 | 尺　度 | | | 負荷量 |
|---|---|---|---|---|
| Factor 1 | 消極的 | － | 積極的 | 0.803 |
| （有能性） | 劣った | － | 優れた | 0.729 |
| | 無能な | － | 有能な | 0.691 |
| | 空っぽな | － | 満たされた | 0.659 |
| | 愚かな | － | 賢い | 0.554 |
| | 疎遠な | － | 親密な | 0.551 |
| | 閉鎖的な | － | 開放的な | 0.541 |
| | だらしない | － | きちんとした | 0.540 |
| | 内向的 | － | 外向的 | 0.512 |
| Factor 2 | 貪欲な | － | 無欲な | 0.732 |
| （身体性） | 弱い | － | 強い | −0.693 |
| | 灰色 | － | バラ色 | −0.662 |
| | 不自由な | － | 自由な | −0.585 |
| | 小さい | － | 大きい | −0.580 |
| | 狭い | － | 広い | −0.540 |
| | 地味な | － | 派手な | −0.504 |
| Factor 3 | 反発 | － | 同調 | 0.776 |
| （温和性） | 憎らしい | － | 愛らしい | 0.756 |
| | 強情な | － | 素直な | 0.685 |
| | つめたい | － | あたたかい | 0.648 |
| | 不安定 | － | 安定 | 0.582 |
| | 貧弱な | － | 立派な | 0.495 |
| Factor 4 | 保守的 | － | 進歩的 | 0.703 |
| （活動性） | 受動的 | － | 能動的 | 0.635 |
| | 遅い | － | 速い | 0.535 |
| | 暇そう | － | 忙しそう | 0.530 |
| Factor 5 | 低俗な | － | 高尚な | 0.746 |
| （豊潤性） | 不幸な | － | 幸福な | 0.629 |
| | 鈍い | － | 鋭い | 0.448 |
| Factor 6 | 目立たない | － | 目立つ | 0.746 |
| （親和性） | 孤立 | － | 連帯 | 0.558 |
| | 悲しい | － | うれしい | 0.529 |
| | | | 累積寄与率 | 59.8% |

と言うよりは，統合された知恵や賢さに注目した因子であると考え「有能性」と命名した。

第２因子では「貪欲な－無欲な」，「弱い－強い」，「灰色－バラ色」，「不自由な－自由な」，「小さい－大きい」などの項目において負荷が高かった。自由さ，強さ，大きさなど具体的な形としてのイメージの因子であると捉え「身体性」と名付けた。

第３因子で負荷量が高かったのは「反発－同調」，「憎らしい－愛らしい」，「強情な－素直な」，「つめたい－あたたかい」などであった。プラスの項目でみてみると，周囲と同調しながら愛らしく自己表現するようなイメージであると捉え，「温和性」と名付けた。

第４因子は「保守的－進歩的」，「受動的－能動的」，「遅い－速い」など項目から，具体的な活動の様子をイメージする内容と考えたので「活動性」とした。

第５因子は「低俗な－高尚な」，「不幸な－幸福な」，「鈍い－鋭い」の項目から，内面の豊かさのイメージと捉え「豊潤性」とした。

第６因子は「目立たない－目立つ」，「孤立－連帯」，「悲しい－うれしい」の項目から「親和性」と名付けた。

以上の６因子を，さらに「身体活動性」のイメージと「精神性」のイメージの２つに大別して表３に示した。平均評定値でみると，「身体性」，「活動性」などの身体活動性のイメージ群よりも，「有能性」や「豊潤性」といった精神性イメージ群を高く評価していた。

表３　老人イメージ６因子平均評定値

| 因　子 | | 平均評定値 | |
|---|---|---|---|
| 身体活動性イメージ群 | 身体性 | 2.647 | 2.468 |
| | 活動性 | 2.288 | |
| 精神性イメージ群 | 温和性 | 3.179 | 2.944 |
| | 有能性 | 3.054 | |
| | 豊潤性 | 2.940 | |
| | 親和性 | 2.603 | |

### ３．学生の属性と老人イメージ

学生の生活属性と６因子の関係を平均評定値で示したのが，表４である。

#### １）同居経験の有無と老人イメージ

同居経験の有無と各因子の平均評定値の差を検定したところ，第１因子の「有能性」において $z=2.65$ ($P<.01$) で差を認めた。同居経験のある学生の方が，同居経験がない学生より，「有能性」を有意に低くみていた。

#### ２）祖父母の健康度と老人イメージ

祖父母の健康度は「健康で社会的な役割をこなしている」，「病気はあるが日常生活は自立しており一人で外出もする」と答えた学生を祖父母自立群，「ほとんど家の中にいて一部介助が必要」，「健康障害があり介護を要する」と答えた学生を祖父母非自立群とした。第１因子である「有能性」において，祖父の自立群と非自立群に，$z=3.14$ ($P<.01$) で有意な差を認めた。祖父が

自立していると答えた群が平均評定値が低かった。また，第6因子である「親和性」では祖母の自立群と非自立群において $z=2.77$ ($P<.01$) 有意な差を認めた。こちらも，祖母が自立していると答えた群の平均評定値が低かった。

**3）祖父母との親密な会話の有無と老人イメージ**

祖父母との親密な会話の有無については，「親しく会話をする」から「会話をしない」まで5段階で評価させ，「親密に話をする群」と「話をしない群」で比較した。第2因子である「身体性」で $z=2.59$ ($P<.01$)を示し有意差が認められた。「親密に話をする群」が平均評定値が高かった。

**4）高齢者を中心とする行事への参加経験の有無と老人イメージ**

第3因子である「温和性」において，$z=2.27$ ($P<.05$)で有意差を認めた。行事への参加経験をもつ学生の方が，平均評定値が高かった。

**5）老年看護をやりたい気持ち（意欲・興味・関心）と老人イメージ**

第6因子である「親和性」において，$z=2.83$ ($P<.01$)で有意差が認められた。老年看護をやりたいと思う人の方が平均評定値が低かった。

**4．高齢者に対する呼称に関して**

学生に今後どのような言葉で年を重ねた人を呼びたいか訊ねたところ，「高齢者」という呼称が最も多く65名であった。

## Ⅳ．考　　察

**1．看護学生の老人イメージ**

図1－1，1－2の結果から，学生は全体として中心よりも左寄り，即ちややマイナスに偏った老人イメージを持っていた。老化の具体的なイメージを記述させた内容によれば，白髪・しわ・腰が曲がるなど，身体の形態的な変化や体力の低下・病気が多い・痛みがある・目が見えにくい・耳が聞こえにくいなど，身体の機能的変化を捉えていた。そして，それらのイメージを具体的に想起したのは，自分の祖父母であると回答した学生が59名と圧倒的に多かった。このことから，身近で見ている祖父母の身体的な特徴が，より具体的なマイナスイメージとして強化されたのではないかと考える。

保坂らが行った首都圏に住む一般大学の学生への調査[8]と比較すると，プラスあるいはマイナスに突出して高くなっている項目，つまり「遅い」，「保守的」，「弱々しい」，「あたたかい」，「優しい」などの項目は，かなりの項目で一致している。その点で言えば，この世代の若者が高齢者に抱くイメージは看護系か否か，都市部か地方かによってそれほど差が生じないとも言える。表3で示したように，抽出された6つの因子を大きく2つに分けて平均評定値で比較すると，精神性イメージを表す因子の方が，身体活動性イメージを表す因子よりも平均評定値が高く，身体的なイメージではマイナスイメージを，精神的なイメージではプラスイメージを持って

表4　生活属性別老人イメージ6因子の平均評定値

| | | | F1(有能性) | F2(身体性) | F3(温和性) | F4(活動性) | F5(豊潤性) | F6(親和性) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 同居経験 | | あり | 2.973 ** | 2.633 | 3.170 | 2.348 | 2.937 | 2.517 |
| | | なし | 3.289 | 2.686 | 3.208 | 2.125 | 2.950 | 2.800 |
| 祖父母の健康度 | 自立 | 祖父自立 | 2.915 ** | 2.648 | 3.137 | 2.336 | 3.024 | 2.702 |
| | | 祖母自立 | 2.988 | 2.665 | 3.243 | 2.303 | 2.943 | 2.525 ** |
| | 非自立 | 祖父非自立 | 3.064 | 2.560 | 3.262 | 2.429 | 2.000 | 2.548 |
| | | 祖母非自立 | 3.000 | 2.429 | 2.583 | 2.625 | 2.750 | 2.833 |
| 祖父母との会話 | | 親密にある | 3.084 | 2.720 ** | 3.308 | 2.303 | 3.006 | 2.660 |
| | | 親密ではない | 3.172 | 2.300 | 3.017 | 2.325 | 2.800 | 2.267 |
| 祖父母以外の高齢者との会話 | | 親密にある | 3.016 | 2.627 | 3.355 | 2.202 | 2.871 | 2.516 |
| | | 親密ではない | 3.173 | 2.593 | 3.103 | 2.410 | 3.000 | 2.603 |
| 高齢者を中心とする行事への参加経験 | | ある | 3.080 | 2.645 | 3.351 * | 2.259 | 2.908 | 2.563 |
| | | なし | 3.039 | 2.647 | 3.078 | 2.310 | 2.959 | 2.612 |
| 老人看護をやりたい気持ち | | ある | 3.058 | 2.665 | 3.176 * | 2.298 | 2.955 | 2.494 ** |
| | | ない | 3.071 | 2.541 | 3.476 | 2.190 | 2.976 | 2.786 |

* P<0.05　** P<0.01　*** P<0.001

いると言える。高齢者の統合力の高さや，経験として蓄積された結晶性能力の高さ，そしてそれらの能力が社会貢献として大いに意味を持つことをさらに強調していく必要がある。加齢に伴う生理的変化の講義の中で，老化のメカニズムや各臓器や各器官の加齢現象について説明している。「身体性」や「活動性」のマイナスイメージについては，老化現象は誰にもおとずれるものであること，健康に年を重ねることの重要性，身体機能として不足しがちな部分へのアセスメントと具体的な援助方法について客観的に考えることが出来るよう方向付けをしていく必要があると考える。

### 2．学生の生活属性と老人イメージ

同居経験ありの学生が，同居経験なしの学生より高齢者に対して否定的なイメージを持ったことは，寺島らの同居経験がない方が否定的なイメージを持つという報告[9]とは異なった。保坂らは，同居経験はそれ自体あまり重要な規定要因ではなく，それぞれの環境の中で学生と高齢者がどのように接し，どのような側面をみているのかがより重要な規定要因だと言っている。[10] その点でいえば，本研究においても同居経験の有無だけでなく，祖父母の健康度や祖父母との親密な会話の有無などの項目で有意差が認められている。物理的に同じ屋根の下で暮らしたことよりも，祖父母とどんな関係であったかがより重要であるとといえる。

また，各因子との関連の中で，同居経験の有無，祖父母の健康度，祖父母との親密な会話などの項目で多く有意差が認められたことから，本研究において，看護学生の老人イメージは身近な高齢者のイメージが老人イメージとして影響していると思われる。他方，「温和性」の因子でも，高齢者関連の行事に参加した経験がある人の方が，あたたかさや安定感など高齢者を肯定的にみていた。これらのことから，講義や実習を通して様々な健康レベルの高齢者との接触や，積極的に社会活動に取り組んでいる（家庭内にいる高齢者でも家事を役割として担っている人なども含む）高齢者との接触の機会を設けていくことで，老人イメージをより豊かに拡げることが出来ると考える。

祖父母の健康度に関して，「有能性」と「親和性」の因子において有意差が認められた。いずれの場合も，自立している祖父母より，非自立の祖父母の値が高かったのは，健康障害があるため孫として何らかの介護に関わったり，あるいは介護に関連して会話や接触の機会も多く，心理的に距離が近いと感じているためではないだろうか。このことは「有能性」の因子が身体的な活動よりも，精神面での有能性というイメージを内在していることにも繋がると考える。

## V．ま　と　め

本学学生の老年看護学講義開始前の老人イメージを明らかにするために，ＳＤ法を用いて調査した。その結果以下のことが明らかになった。

1．学生全体の老人イメージはややマイナスに偏ったイメージであった。
2．老人イメージの因子構造は，「有能性」，「身体性」，「温和性」，「活動性」，「豊潤性」，「親和性」の６因子が抽出され，精神性イメージを身体活動性イメージより高く評価していた。
3．本学学生の老人イメージ形成には，身近な高齢者である祖父母の健康度や祖父母との関係性が影響していることが示唆された。
4．以上の結果より，看護学生の老人イメージをより豊かにしていくために，老年看護学の教育内容として，様々な健康度レベルにある高齢者や社会活動をしている高齢者との接触の機会を取り入れていくことの意義が確認できた。

## VI．おわりに

この研究を通して，本学学生の老人イメージとその形成過程の一端を知ることができた。

年を重ねた人を「高齢者」と呼びたいと回答した学生の理由をみると，「老」という文字の中に古い時代のマイナスイメージを嗅ぎ取ってい

る様であった。新しい視点で高齢者を見ていこうとする，学生たちの意識の変革も感じられた。今後，講義や実習を進めていく過程で，初期の老人イメージがどのように変化するのか，まその変化に影響を及ぼす因子についても継続的にみていきたいと考える。

## 引 用 文 献


1）日本看護協会編：介護保険とケアマネージャー（第2版），日本看護協会出版会，1998.

2）古谷野亘他：中高年の老人イメージ－ＳＤ法による測定－，老年社会学，18(2)，147-152，1997.

3）寺島喜代子：看護過程展開における学生の傾向ペーパーペイシェントを用いた学内実習より福井県立看護短期大学研究紀要，16，153-160，1991.

4）保坂久美子他：大学生の老人イメージ－ＳＤ法による分析－，老年社会学，27，23-33，1988.

5）倉鋪桂子他：看護学生の老人のイメージについて，島根県立看護短期大学紀要，2，9-15，1997.

6）吉田正子他：看護学生の老人イメージに関する研究(1)－学生の生活背景と老人イメージ－
神戸市立看護短期大学紀要，11，55-64，1992.

7）前掲書 4)

8）前掲書 4)

9）寺島喜代子他：看護学生の老人イメージについて－老人イメージスケールを用いて－，福井県立看護短期大学部論集，8，29-37，1998.

10）前掲書 4)